

ドイツ 本との出会い

大阪市立大学大学院文学研究科教授

阪口 弘之

私は、12年前にハンブルクによせていただいたが、それ以来、ハンブルクは私の第2の故郷のように思える。その最初の訪問時、シュナイダー先生や、宮崎先生らに御協力いただき、ベルリンにも2度ほど本を見せてもらいに行った。ちょうどエヴァ・クラフトさんの在独日本古典籍の新しい目録ができつつある頃だったので、その目録の完成を待ち望みながら、どういう本がドイツにあるのかを楽しみにさせていただいた。

今回、私どもCOEはいろいろなテーマを掲げさせていただいているが、「在独日本古典籍の共同総合調査」も一つの柱として位置づけている。「共同」というのは、ハンブルクと大阪が共同して、ドイツにある古典籍の総合調査をということだが、これは、現場ではドイツの先生方にたいへん御負担をおかけすることになる。しかしそれを超えて、ハンブルクの先生方にはたいへんな御協力をいただき、たとえば、あとで申し上げるが、私どもは20年来追い求めてきた本を、明日フランクフルトまで見に行かせていただくことになった。

そこで、一つ思い出を申し上げますと(以下、資料 参照)、私の友人で愛知大学の沢井耐三さんが、ちょうどそのころ、ベルリンのエヴァ・クラフトさんと北村浩さんの三人で、ここにお持ちしたのだが、『西ベルリン本 お伽草子絵巻集と研究』という本を刊行された。

そこには5つの絵巻関係のものが紹介されている。その中に「役の行者」が入っている

が、その本は、沢井君がその解説で書いているのだが、私が、その少し前に西尾市立図書館の岩瀬文庫で、浄瑠璃本文をとった草紙本の「役の行者」を発見し、これは浄瑠璃だということで、『古浄瑠璃正本集』に取り上げたところ、沢井君が、ベルリンの絵本もその本文とまったく同じだということに気がついたのである。

そういうところから、「役の行者」の絵巻が非常に関心を呼ぶようになった。その後、市古貞次先生が、中世文学会で、大英博物館にももう1本あると紹介された。この本は、その後いろいろな方が紹介され、最近では『図説 役行者』という本にも出ている。役行者はたくさん本があるのだが、このように浄瑠璃系の本文を持ったものがそういう絵巻になっているのである。

普通、こういうケースの場合、一般的には、絵巻から草紙の本が出たというように考えるわけであるが、しかしそうではなく、古浄瑠璃の正本があり、そこから西尾市立の草紙本が生まれた。これはたいへん珍しいケースである。そして、まったく時を同じくして出てきたベルリンの絵巻、その時は大英博物館の本はまったく知られていなかったが、それも同じ正本、つまり浄瑠璃の本から出ているということがわかったのである。

こういうことになってくると、こういう絵巻や草紙本はどのようにして作られるのか、ということが気になる。確かにそういう事例がないわけではない。浄瑠璃とか説経、あるいは普通の草紙本を取り出し、大形の奈良絵本が作られたり、あるいは大形でなくても、いろいろな形の絵本が作られたりしている。たとえば明暦刊行の「せつきやうさんせう太夫」が、奈良絵本の「出世物語」になったりしている。

もっと早い事例では、岩佐又兵衛風古浄瑠璃絵巻群というものがある。岩佐又兵衛の工房で、古浄瑠璃や説経の本文をとった実に豪華な絵巻が作られている。これはたいへんなもので、おそらく今でいうと、億の単位、それも1億円や2億円という額ではなく、ものすごい額をかけて作られている。

こうしたようなことをみていくと、語りの現場とテキストの制作される場がどのように繋がっているのか、究めるべきところがあるように思える。さらに難しい問題は、初期の古

瑠璃の本文、今紹介しているような本文の性格である。

ちょうど 1600 年ぐらいに、浄瑠璃や説経が操り人形と結びつく。そして今の文楽などの元になる形ができるわけだが、その絵巻などの本文は、盲目の琵琶法師たちによって語られていた純粋な語り本文なのか、それとも人形を操るための本文なのか、その見極めが重要になってくる。

一般的には、長い時日をかけて、いろいろな語りが自然自然に操りにのるような本文に整備されてきたのであろう、と考えられているわけだが、そうは単純には言えないようでもある。そうした事例をレジュメに出しておいた。

「ふせや」という御伽草子でも有名な作品があるが、古浄瑠璃にも「ふせやのものかたり」がある。古浄瑠璃の本文は次のようになっている。

さてもそのゝち中ころの事なるに、はなのみやこに、いゑたかとして、天上になを
ゑ給ひけり、御なをは、はりまのちうしやう、みなもとのたゝのふと申ける

これをお読みになられたら、非常におかしな文章だとすぐおわかりになると思う。「いゑたか」という名前と「みなもとのたゝのふ」の関係がわからない。ところが、御伽草子の 1 本の中に、尊経閣という東京の文庫にある明応 8 年の写本や、島津久基さんという大先生がお持ちだった写本などには、次のような本文が認められる。

いまむかし、はなのみやこに、いゑたかき人の御子に、はりまのせうしやう、み
なもとのたゝのふときこゆる人をはしけり

これは、古浄瑠璃の本文が、こういう系統の本文を写し間違えたのだと思う。「いゑたかき人の御子に」というのを「いゑたかとして、天上になをゑ給ひけり」と。

つまり、古浄瑠璃の初期操本文は、従前考えられているような、語り物時代の本文が徐々に操化されただけでなく、語りの場に提供された本文が存在する。浄瑠璃本文の出発点が、語りそのものにあるとは限らず、それに先行して、語りの場に提供された本文もあったということである。しかも、その本文は、テキストを媒体とする場をくぐり抜けているのである。

そういうことを考えていくと、初期の本文成立は、絵草子屋や出版書肆がどのように関与したのかも気になってくる。本来、某太夫の語ったものを某太夫の正本だとして本屋さんが刊行するわけだが、そうではなく、本来現場のあとに来るべき書肆、本屋などが語り場を経ないままに、正本などを板行することもあるのではないか。そういう本文のありようも考えられないと、うまく説明もつかないのではないか。そのようなことを思っている。

これに関連することだが、このようなことがあった。皆さん方もお読みになる新日本古典文学大系の『古浄瑠璃 説経集』を、私は信多純一先生と担当した。同じシリーズで、『室町時代物語集』は、市古貞次先生と先ほどお話した沢井耐三さんなどのメンバーが担当されたが、当初、『室町時代物語集』の中に古浄瑠璃の「浄瑠璃十二段」を入れる予定であったという。

これに対して、編集会議で相当な議論があった。それは、新潮日本古典集成に松本隆信先生が『御伽草子集』を出され、そこに「浄瑠璃十二段草紙」が入っているが、先生はその底本を、東大にある慶長ごろの絵入古活字本に求められた。

これに対する学界の評価が分かれている。近世の演劇研究の側からいえば、東大の当該本は決して「浄瑠璃物語」を代表するものではない。もし市古先生らの担当となれば、おそらく松本隆信先生と同じ編集になるだろう、それでは困るということで、山崎美成旧蔵本という十六段本を底本にする校訂本文をもって『古浄瑠璃 説経集』で出すことに決着した。この交渉には、信多先生があたられ、したがって担当も信多先生なのだが、市古先生もそれでよいという見解をお示しになられたと聞いている。

このことについてもう少し申し上げると、「浄瑠璃物語」はこういうお話である。これは、義経、つまり牛若丸と浄瑠璃姫の物語だが、4つの部門から成り立っている。三河の国司かねたかは、街道一の遊君を妻にしていたが、子どもがないので、峰の薬師に祈り浄瑠璃姫を授かった。これが申し子譚と言われているものである。

それが最初にあり、次が主部であるが、皆様方ご承知の通り、牛若丸が金売吉次に伴わ

れ、奥州に下っていきますね。その途中、矢作の宿に泊まり、浄瑠璃姫の御殿で催す管弦に笛をあわせて、ついに一夜の契りを結ぶ。ここが非常に長く、またあとのお話にも関わりますが、本当に美辞麗句、これでもかこれでもかと美文の限りを尽くして「浄瑠璃物語」の中心がここにある。

ところが、牛若は東北の地に下っていかねばならない。再会を約して別れるのだが、駿河の国で病気になる。金売吉次は先に出発して、牛若は、吹上の浜に捨てられ危篤に陥るのだが、そこに八幡さんが現れ、八幡さんは源氏の氏神でありますから、牛若丸の急を姫に知らせます。姫は侍女の冷泉とともに来て、姫の流した涙が、末期の水というのでしょうか、牛若の唇を浸し、そのために牛若は蘇生するという奇瑞が見える。これを吹上の段という。

このように、牛若丸は命が果てるところを助かり、奥州の藤原秀衡のもとに着き、やがて数万騎を率いて都に上るが、浄瑠璃姫は牛若を恋いこがれて、すでに空しくなっていた。そこで墓を尋ね、法華経を唱えて回向の和歌を詠むと、五輪が砕け、ひとつは牛若丸のもとに、ひとつは空中に、一つは墓の標として残った。その跡に寺を建て、冷泉寺と名付けて、侍女冷泉に賜った。こういう話を五輪砕という。

「浄瑠璃物語」は、この4つの部分から成り立っているのだが、いろいろな所に残るテキストにも、2つとして同じものがない。そこで、どれが最善本かということが、先ほどの話に関わってくるわけだが、松本隆信先生が新潮のテキストに選ばれた慶長古活字版というのは、実は「申し子」と「主部」と「吹上」で成り立っていて、最後の部分がないのである。五輪砕がない。ところが、山崎美成旧蔵本は最後の五輪砕までである。

これはどういうことかということ、「浄瑠璃物語」は本地物である。であれば、主人公が最後には仏や神になったというように、語り納める部分が本来あるべきだ、というのが信多先生の見解である。そういう形が本来の「浄瑠璃物語」の姿だということである。

これに対して、松本先生の立場は、おそらく古活字版というのは、出版文芸が日本で成り立ったとき、最初に生み出された。そういう意味で、その後の影響は非常に大きく、そ

の文学的展開を考えると、こちらのほうがいいのではないか。そういう主張があるのだらうと思う。

これはそもそも『古浄瑠璃正本集』で、横山重先生がその『正本集』の第1番を古活字版で飾られた。横山先生も、その時点では、古活字版が「浄瑠璃物語」の最善本と考えられていたふしがある。松本先生もそのことに基づかれたのであろう。

古活字版は文芸の起点である。「御伽草子」を取り上げるのであれば、この本しかないという見解なのだが、しかし、浄瑠璃の本来の姿はそういうものではないであろうということ、結局、信多先生が担当する新大系では、新しい見解、そういう本文はないのだが、諸本をいろいろと文献学的方法で検討して、ひとつの校訂本文を作って、これが古い浄瑠璃の姿であろうと言われて提示されているのである。その核になっているのが、山崎美成旧蔵本である。

この二つの立場の相違から、さらに考えねばならないのは、要するに、語りの場と古活字版の本文が、どのように繋がっているのかということである。古活字版は、朝鮮半島から活字文化が入ってきて、初めは漢籍関係のものが和刻本として出された。さらに仏書や医書もたくさん出された。

純粋な和書、つまり国文的なものはあまりないのだが、それでも、「太平記」関係ですね。これは国文関係に入れてよいかどうか問題はあるが、「徒然草」や「伊勢」のようなものも出ています。それに「日本書紀」「源氏」「狭衣」などもです。

そういうものの中に浄瑠璃の本文があるわけです。ところが、この古活字本文は、どう考えてみても、語りの場と直接つながるようなところで本文が保持されてきたとは考えられない。国文の例で言えば、歌道や古典享受に関わった貴族社会の中に本文が保持されてきている。そういうところと浄瑠璃の語りの場とは、あまりにも位相差があるように思える。

したがって、果たして「浄瑠璃物語」からその後の文芸が大きな影響を受けたとしても、当然、語りそのものからの影響もあるでしょうから、そのあたりの見究めが大事になるの

です。

私は、語り物は一般に地方に生まれ、都へ運ばれ、都市の文化として洗練されていく。そういうものが多いと思うのです。その生成伝播される過程で、語り物同士でさまざまな交流が見られる。「浄瑠璃物語」の諸本のありようは、都での知識階級の享受のありようを反映しているのか、それとも街道を物語が運ばれる中での生成発展をも反映するところがあるのか、そこが問題です。

加えて、先ほども申し上げたように、古浄瑠璃の本文は、はたして語りの本文か操りの本文かという問題もある。それから本文性格からいうと、純然たる語りの本文なのか、あるいは記載の場をくぐり抜けたものなのか。そういう問題もあり、本文をどうとらえてよいか、なかなかわからないわけです。

そういう中で、古活字本を高く評価する立場は、そこに視点を据えて、そこからの主として影響関係を、雅俗の混融、文芸性の位置づけなども絡め、注釈を施していくということになっている。しかし、はたしてそのところでよいかという問題である。

私は、本文は極めて発展性のある流動的なものであって、その時々がありようがいろいろな形で現れている。そう考えている人間で、古活字本文もひとつの姿でしかない。それをひとつの基軸にして、「御伽草子」「仮名草子」「室町物語」との関係をはかったところで、それがどれ程の意味をもつかということである。

そもそも「御伽草子」や「室町物語」といった名称問題も、この作品の発展性の問題からんでいる。「浄瑠璃物語」も流動的な本文だし、「御伽草子」や「室町物語」と呼ばれる諸作品も、特に語り系のものは流動的な本文をもつ。だから、もう一段レベルを引きあげて、諸本と諸本との関係で影響関係を相互的に検証する必要がある。

従前、「室町時代物語」研究は、分類論を基礎に展開されてきた。市古貞次先生は『中世小説の研究』で6分類をされ、現在も、たとえば徳田和夫さんの『お伽草子辞典』を見ても、分類項目とかグループわけとかが重視されている。

この類想性や類同性についての考察は重要なものであると、私も思うが、ただ、語り物

系の物語にあっては、もっと時代性を踏まえて考えるべきで、語り手たちが街道を行き来し、互いにすれあうように、交流を見た結果の類想性、類同性であるのか、それとも記載化されたある文章が基点となって、その影響下に次々と新しい本文が生み出されていったのか。そのへんのところをきちんと見究めないと物語の本当のところは見えてこないのではないか。つまり、分類性という指摘が、分類それ自体が目的化していて、文学史的な視点に結実していない。そういう問題がある。

このことは、たとえば『室町時代物語集』所収の「師門物語」と、私が担当した「ほり江巻双紙」この2作は非常によく似た作品であるが、その注釈方法は似て非なるものがある。今申し上げたような問題を含んでいて、本質的に違う。

私は、市古貞次先生の業績もすばらしいと思うし、その前の時代の、島津久基さんの『近古小説新纂』などは、大変感銘を覚えた。ああいうレベルに、さらに文学史的な視点を加味すれば、壮大な「室町時代物語」研究の地平がひらけるのではないかと考えている。

こういう話をする、松本隆信先生の批判をしたように思われるかもしれないが、実は松本先生と私どもは、同じグループで一緒に仕事をしてきた。『室町時代物語大成』の中には、たとえば私どもが『古浄瑠璃正本集』に採択すべく作った原稿が、これは浄瑠璃よりもそちらに入れるほうが良いということで、収まっているものもある。

逆に、今度は松本先生がお作りになられた原稿を『古浄瑠璃正本集』にいただくとか、常に意見の交換をやってきたわけである。そんなわけで、たとえば古浄瑠璃の付録という形で入れた「月かげ」、思いつくままに挙げているが、「せんみつ丸」、「むらまつ」、「あかしの物語」などといったテキストをどう位置づけるかが、今後の大きな課題になってくるのだろうと思っている。

話が30分という中では十分な説明ができなかったが、ドイツでは、お陰様で非常に楽しい日々の中で本を見せてもらってきた。前に来たときにも、ミュンヘンに「どんらんき」という正本があることを知った（資料参照）。これは、師弟関係にある師匠の板木をつぶして弟子の板木（正本）を作っているのだが、日本にはなく、ミュンヘンのみに残って

いる。

明日、シュナイダー先生やフランクフルト大学の名誉教授マイ先生らの御協力をいただき、フランクフルト市立工芸博物館フォーレッチ・コレクションにある「さよひめ」という本を見せていただくことになったのだが、ここにたどりつくまでには、ずいぶん長い年月があった。

フランクフルト市立工芸博物館は、旧手工芸博物館、日本では今、実用芸術博物館と言っているが、ドイツではMAKというそうである。そこに探し求めてきた本があるということが、先生方のお陰で、つい最近わかった（資料 ならびに 参照）。むろん、どういふ本文であるのかわからないが、私は東洋文庫で、奈良絵本の「さよひめ」という本を発見した。

戦時中、やっとの思いで収蔵された膨大な本が、いつしかその存在を忘れ去られていたのだが、たまたま私の調査で発見され、貴重な本が出るわ出るわで、その日の東洋文庫は蜂の巣をつついたような騒ぎであった。館内用目録に手書きの書名が多数書き込まれているのは、その時出てきた本である。

その本と、以前から知られていた京大本とが非常に近い。これで「さよひめ」の古い姿がわかると思ったのだが、一方でまだありそうだとも思った。その本に、明日出あえるように思えてならない。しかし、明日にならないと本当のところはわからない。でも、期待に胸がふくらんでいる。

まだ見ぬ京の夢だが、すばらしい本が出てきたら、これは日独共同の成果として、ドイツに縁があるわけであるから、まずはドイツで発表いただき、日本でも紹介させていただきたい。そのようなことをお願いしている。「在独日本古典籍の共同総合調査」が成功することを夢みながら、御関係の先生方の御好意に御礼を申し上げて、私の発表を終えさせていただく。